

Week 5: 音韻論

Lecture 7-8: 音声学と音韻論, 音素と弁別素性

- 音(sound)の違いにより意味の違いが生じる場合, その音を音素(phoneme)と呼ぶ.
- 音素は「日本語の音素」「英語の音素」のように, 個別言語毎に決定する必要がある.
英語では区別するが, 日本語では区別しない音や, その逆の例を考えよ.
- 音素は / / に, 区別しないが異なる音は[]に, 発音記号を記入する.
日本ではこのルールがあまり守られていないので注意.
- 日本語のガ行子音は語頭では必ず[g]だが, 語中では鼻濁音[ŋ]を用いる方が「美しい」とNHKは決めている. この例では[g]と[ŋ]は共に日本語の音素/g/の異音(allophones)である.
ただし, 擬声・擬態語の類(ガラガラ, グーグー), 数詞の五(ジューゴ, ゴヒャクゴジュー), 「軽い」接頭辞のつくもの(オゲンキ, フゴーク), 後部の語頭がガ行音で, 複合の度合いの弱いもの(コートーガッコー, マドガラス)などは鼻音化しない(秋永 2004).
- 「本」「本棚」「本箱」「本会議」「本意」「本案」の「ん」の位置に現れる音も, それぞれ微妙に異なるが区別する必要がない. よって日本語では音素/n/だけを設定し, ナ行子音の文字としてnを採用した.
- 音素を設定する際に比べる二つの異なる音のペアを minimal pair と呼ぶ.
- (作業) 日本語の母音音素を確定するために必要な minimal pairs を挙げよ.

Lecture 9: 超分節素

- 子音や母音のような小さな単位(segments)に区切っては分析できない音の違いを suprasegmentals(超分節素)と呼ぶ.
- 子音や母音よりも大きな単位として, 音節(syllable)がある. 普通その中心に母音がある.
- 特殊拍と呼ばれる「っ」「ん」「ー」を含む日本語のカナ文字は, 一音節に相当する.
「っ」「ん」「ー」を一拍とカウントする単位をモーラ(mora)と呼ぶ.
- 「っ」「ん」「ー」の有無は意味の違いを生じるので, 音素とすることもできる.
(問題)/R//N//Q/を設定せずに意味の違いを表すにはどうすればよいか考えよ.
- ある単語の一部の音節が他の音節よりも目立つ時, その部分に「アクセントがある」と呼ぶ.
- アクセントのある部分の音は, 「高い」「強い」「長い」などの特徴を持つ.
英語は「強さ」が, 日本語は「高さ」が支配的なので, 英語は「強勢アクセント」日本語は「高低アクセント」とであると分類することがある.
- 単語単位ではなく, 文単位の声の高さの変化を「イントネーション」と呼ぶ.
低く終わることにより文の終わりを示したり, 文末を上昇させて疑問の態度を表したりできる.